

1. 第1回アジア・太平洋水サミット開催報告

第1回アジア・太平洋水サミットの概要

- 会期:2007年12月3~4日(2日間)
- 開催地:大分県別府市
- 主催者:アジア・太平洋水フォーラム/第1回アジア・太平洋水サミット運営委員会
 - 議長 森喜朗 第1回アジア・太平洋水サミット運営委員長
 - 副議長
 - ・タジキスタン共和国 エマムアリ・ラフモン 大統領閣下
 - ・キリバス共和国 アノテ・トン 大統領閣下
 - ・ブータン王国 キンザン・ドルジ 首相閣下
 - ・カンボジア王国 リム・キーン 水資源・気象大臣
 - ・中華人民共和国 フー・スーイー 水利部副部長
 - 書記
 - ・エルナ・ウィットラー アジア・太平洋水フォーラム執行審議会副議長
 - ・ラヴィ・ナラヤナン アジア・太平洋水フォーラム執行審議会副議長
- 参加者の内訳:
 1. 参加国・地域:56の国・地域(うち、アジア・太平洋地域からは40の国・地域)
 2. 首脳級参加:10の国と地域から10名
大臣級参加:32名
アジア・太平洋地域からの閣僚級以上の参加:36の国と地域
 3. 参加者数:アジア・太平洋地域の政府関係者231名(うち海外から226名)、招待出席者140名(うち海外から72名)、合計371名(うち海外から298名)
 4. 開会式出席者 880人(うち海外から約300人)
 5. サミットを契機に開始(宣言)された新たな取り組み:17個
 6. プレス260名(うち海外から40名)、記者会見件数:16件、新聞記事掲載数:342件(12/1~12/18)
 7. オープンイベント開催数:67イベント(来場者数:約5,000名)
 8. 運営支援のためのボランティア約300名
 9. ボランティア:300名超
 10. 通訳:28名
 11. 警察:約1,500名(サミット全体)、約200名(ビーコンプラザ内)
- 主要な参加者
 - 日本国皇太子殿下
 - 国連「水と衛生に関する諮問委員会」議長 オランダ王国ウィレム・アレキサンダー皇太子殿下
 - タジキスタン共和国 ラフモン大統領
 - パラオ共和国 レメンゲサウ大統領
 - キリバス共和国 トン大統領
 - ナウル共和国 スコティ大統領
 - ミクロネシア連邦 モリ大統領
 - ニウエ ビビアン首相
 - ツバル イエレミア首相
 - ブータン王国 ドルジ首相
 - 福田内閣総理大臣
 - キルギス共和国 ヌルウル副首相
- サミットで開催された10のトピックセッション
 - ヒマラヤ地域における気候変動、氷河、水資源
 - 水に関する行動への最高経営責任者(CEO)の責任
 - 水に関わる投資とその効果のモニタリング
 - 2008国際衛生年の地域発進式
 - 水と気候に関する島嶼国対話
 - アラル海流域における水の安全保障確保のための約束:協力と競合
 - 水関連災害管理
 - 発展と生態系のための水
 - アジア・太平洋地域における水の安全保障確保のためのリーダーシップ:
知識、資金調達、人材育成
 - 地域の行動のための能力向上

2007年12月3、4日に大分県別府市において、「第1回アジア・太平洋水サミット」が開催された。「アジア・太平洋水サミット」(以下、水サミット)は、2006年3月に第4回世界水フォーラムにおいて設立が宣言され、同9月に活動を開始したアジア・太平洋地域の水問題解決に向けたあらゆる水関係者によるゆるやかなネットワークである「アジア・太平洋水フォーラム」の活動の一環として、2～3年に一度開催されるものである。

初会合となった「第1回アジア・太平洋水サミット」は、「アジア・太平洋水フォーラム」と国内外の有識者からなる「第1回アジア・太平洋水サミット運営委員会」が主催し、「アジア・太平洋水フォーラム」の事務局を務める日本水フォーラムが、水サミットの事務局として、約1年にわたる準備活動をリードした。

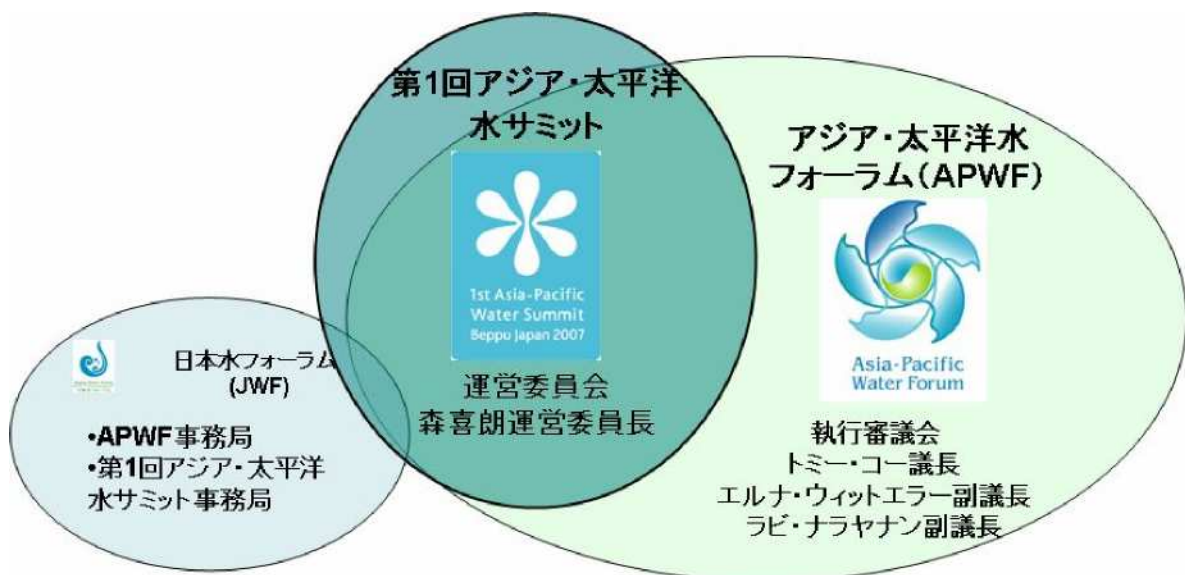


図 1: サミットの組織体制

「第1回アジア・太平洋水サミット」は、世界初の水に関する首脳級会合である。その開催は、水問題の解決を加速し、ミレニアム開発目標を達成するには、科学的知見や事例・経験の共有などとともに、政治的なコミットメントが大きな役割を果たし得る、という考え方のもと、アジア・太平洋水フォーラムの設立と同時に提案されたものである。

本水サミットには、日本を含むアジア・太平洋地域の10カ国・地域の首脳級、閣僚級が32名、及び多くの各界のリーダーが参加し、技術的な見地からではなく、国の発展、政策といった観点からハイレベルな議論が展開され、参加者の決意や思いは「別府からのメッセージ」という形で閉会式において発表された。

水サミット開催後、すでに政治的な約束や具体的な行動につながる動きが始まっている。例えば、日本政府は、2008年始めに、海面上昇や水資源の問題などに関する調査団をツバルに派遣した。

1 開会式

第1回アジア・太平洋水サミットは、12月3日(月)11時より開催された開会式での、森喜朗 第1回アジア・太平洋水サミット運営委員長による挨拶で幕を開けた。開会式会場を埋めた880人の聴衆は、開会までの時間、アジア太平洋放送連合(ABU、本部マレーシア・クアラルンプル)制作によるアジア・太平洋の6カ国の水問題に関するドキュメンタリーを鑑賞した。

森委員長による開会挨拶では、世界の総人口の約60%に当たる37億人が住むアジア・太平洋地域では、5人に1人が安全な飲料水を利用できず、また人口の約半数が適切な衛生設備を利用できない状況にあること、そして水災害による全世界の死者の約80%はこの地域で発生していることなど、アジア・太平洋地域が抱える水問題について触れられた。そして、水問題は単に「水」関係者にとどまらず、国のあり方そのものに大きな影響を与える重要な要素であり、国家の首脳が先頭に立って取り組むことが肝要である、と第1回アジア・太平洋水サミット開催の意義を述べた。



開会挨拶の次に、皇太子殿下よりお言葉を賜った。皇太子殿下は、お言葉で、潘基文国連事務総長の要請により、国連「水と衛生に関する諮問委員会」の名誉総裁に就任されたこと、アジア地域における水と衛生の問題、水災害の問題は困難な状況にあることに言及され、世界の水と衛生に関する知見を広め、諮問委員会議長であるオランダ王国ウィレム・アレキサンダー皇太子殿下や諮問委員と共に、力を合わせて活動に貢献したいとの決意を表明された。



続く、福田康夫 内閣総理大臣のご挨拶では、日本は水分野における国際協力、とりわけ災害対策の面で長い歴史と豊富な経験を有していること、今年5月日本政府は、発展途上国が経済発展と温室効果ガスの削減という2つの目標を同時に達成できるよう、新たな経済支援の枠組みを構築したこと、そして第1回アジア・太平洋水サミットが、G8北海道洞爺湖サミット(2008年)に向けて、強力な推進力になることを強調し、水がG8の議題に取り上げられるだろうと述べられた。



次に、トミー・コー アジア・太平洋水フォーラム執行審議会議長が、2006年9月の活動開始以来のアジア・太平洋水フォーラムの活動を報告するとともに、アジア・太平洋地域が直面

する水問題の深刻さと、多くの国で行われている革新的な取組みをまとめた『ポリシーブリーフ 2007』（アジア・太平洋水フォーラムからの提言書）の内容を紹介した。また、サミット参加者、特に各国のリーダーに、水を政治の最優先課題にするために一歩踏み出し、自らの責任を果たし、地域の水問題の解決に向けて共に力を尽くそうと呼びかけた。

壇上転換後にはオランダ王国ウィレム・アレキサンダー皇太子殿下による基調講演、藩基文 国連事務総長からのビデオメッセージ放映、皇太子殿下による記念講演が行われた。

オランダ皇太子オレンジ公は、農村と都市の両方において水問題を解決することは、経済成長を促す 1 つの重要な鍵であること、アジア・太平洋水フォーラムの優先テーマと橋本アクション・プランで指摘された 6 つの主要分野との関連について言及した。

藩基文事務総長はビデオメッセージの中で、特に気候変動との関わりにおいて地域の水問題の深刻さを強調し、水サミットの重要性と行動の約束の必要性を指摘した。



トミー・コー
アジア・太平洋水フォー
ラム執行審議会議長



ウィレム・アレキサンダー
オランダ王国皇太子殿下



藩基文(パン・ギムン)
国連事務総長

皇太子殿下からは、第3回世界水フォーラムでの記念講演、第4回世界水フォーラムでの基調講演に続いて、今回の水サミットでも「人と水ー日本からアジア太平洋地域へー」と題する記念講演を賜った。ご講演の中では、かつて訪れたネパールで女性や子どもが水くみに苦勞している状況を見て開発途上国で水問題が深刻であること、また地球温暖化が水循環に与える影響ことを知り、幅広い水問題への関心を深めてきたこと、川や海は地域や国を隔てるものではなく、水運を通じて地域や国を結びつけるという恩恵があること、古くから渇水という「足りない水」、洪水という「多すぎる水」に対応しながら国づくりを行ってきた日本の歴史などについて述べられたのち、ミレニアム開発目標に言及され、特に衛生施設の面で、全世界もアジア地域も達成が困難な状況であり、新たな技術の発展に期待を表明された。また、ヒマラヤの氷河融解や太平洋島嶼国での海面上昇等の地球温暖化による問題について、アジア地域でも被害が頻発していることに心を痛めており、それについてサミットで実りある議論がなされることを期待しているとも述べられた。



皇太子殿下による記念講演

II 議長、副議長、書記の任命／アジェンダの採択

開会式、昼食の後には、本会議での議論が始まった。まずは、議長、副議長、書記の任命とアジェンダの採択が行われ、議長に森喜朗 第1回アジア・太平洋水サミット運営委員長、副議長に各サブ地域から、タジキスタン共和国 エマムアリ・ラフモン 大統領閣下(中央アジア)、キリバス共和国 アノテ・トン 大統領閣下(オセアニア・パシフィック)、ブータン王国 キンザン・ドルジ 首相閣下(南アジア)、カンボジア王国 リム・キーン 水資源・気象大臣(東南アジア)、中華人民共和国 フー・スーイー 水利部副部长(北東アジア)の5名が就任した。また、書記には、アジア・太平洋水フォーラム執行審議会副議長であるエルナ・ウィットラー、ラヴィ・ナラヤナンの両氏が任命された。

III 首脳級参加者による講演

続いて行われた首脳級参加者による講演では、参加した9名の首脳級参加者がそれぞれの抱える水問題を述べた後、ユネスコの松浦晃一郎事務局長が総括を行った。以下に地域毎に首脳級による発言の要旨を示す。



タジキスタン共和国
エマムアリ・ラフモン大統領
副議長



パラオ共和国
トミー・レメンゲサウ大統領



キリバス共和国
アノテ・トン大統領
副議長



ナウル共和国
ルドウィグ・スコティ大統領



ミクロネシア連邦
エマニュエル・モリ大統領



ニウエ
ヤング・ビビアン首相



ツバル
アピサイ・イエレミア首相



ブータン王国
キンザン・ドルジ首相
副議長



キルギス共和国
ヌル・ウル・ドスボル副首相

＜中央アジア：タジキスタン大統領、キルギス副首相＞

- 自国経済が、とりわけ水関連災害に対して脆弱であると指摘
- アラル海流域を含む水問題の解決のために協力して取り組む必要がある
- 投資の拡大、特に老朽化した水インフラの修復のための投資拡大に、早急に目を向けなければならない

＜大洋州諸国：キリバス大統領、パラオ大統領、ナウル大統領、ミクロネシア大統領、ニウエ首相、ツバル首相＞

- 国内には河川が無く、地下水資源も不安定であるために、水不足が避けがたい問題である
- サミットを契機に資金・技術支援の約束が増えることを期待する
- いくつかの島嶼国では、気候変動に関連して予測される海面上昇やサイクロンの増加が国民の生命や生活を守る上で主要な懸念となっている

＜ヒマラヤ地域：ブータン首相＞

- 気候変動の影響により急速に氷河が後退し、氷河湖決壊による鉄砲水が下流域の住民に被害を及ぼす恐れがある

IV セッション

(1) ヒマラヤ地域における気候変動、氷河、水資源

主催：国際総合山岳開発センター(ICIMOD)

本セッションは、茨城大学の三村教授が議長を務め、皇太子殿下ご臨席の下、開催された。インドのソズ水資源大臣、中国のフー水利部副部長、山本国土交通大臣政務官、野口健運営委員による基調講演の後、ブータン首相、ネパールのカルキ水資源大臣、水災害・リスクマネジメント国際センター(ICCHARM)の竹内センター長等によるパネルディスカッションが行われた。

議論の中では、近年、氷河後退が加速し、その影響が顕在化しようとしている事実に対して注意喚起がなされ、水資源に関わる気候変動とその影響を評価・モニタリングするために情報共有を進め、ヒマラヤ地域の各国間の協力の推進が不可欠であることが認識された。

(2) 水に関する行動への最高経営責任者(CEO)の責任

主催:国連グローバルコンパクト

本セッションでは、主催者である国連グローバルコンパクトより、アジア・太平洋水シナリオが発表された後、幸田チャーミン 国連広報センター所長の進行によるパネルディスカッションが行われた。ミクロネシア連邦大統領、世界水パートナーシップ(GWP)のキャトレイ・カールソン総裁、東京電力の田村会長など、アジア・太平洋地域で顕著な活動をしているビジネスリーダー10数名によるパネルディスカッションでは、アジア・太平洋地域のビジネスリーダーより、数多くの水に関する優良事例が示されると共に、地域のビジネスセクターに対して、CEO 水マニフェストへの支持の呼びかけがなされた。

(3) 水に関わる投資とその効果のモニタリング

主催:国連アジア太平洋経済社会委員会(UNESCAP)

本セッションでは、アジア・太平洋水フォーラムの主要な活動の柱(KRA)4のリード組織を務める UNESCAP から、KRA4 の検討結果と提言の紹介がなされたのち、UNESCAP、国連食糧農業機関(FAO)、アジア開発銀行(ADB)、世界保健機関(WHO)の代表等による提言に関する技術討論や KRA4 の具体的な取り組みに関する討論が行われた。討論の結果、アジア・太平洋地域で蓄積された経験を、いかに緊急的ニーズである「投資とその効果のモニタリング」を政策へ反映し、「統合水資源管理」や「水と衛生」といった優先課題とモニタリングを結び付けていくべきことが示された。

(4) 「2008 国際衛生年」の地域発進式

主催:国際協力銀行(JBIC)、UNESCAP、国連経済社会局(UNDESA)、
国際連合児童基金(UNICEF)、世界保健機関(WHO)

特別セッションとして開催された本セッションは、サミット参加者以外の一般市民も出席可能な唯一のプログラムとなった。セッションは、田波 JBIC 総裁、並木環境大臣政務官による開会挨拶によって始まり、オランダ皇太子オレンジ公による開始宣言後に、国連水関連機関調整委員会(UN Water)、日本水フォーラム(JWF)、世界トイレ機関(WTO)による世界とアジア・太平洋における衛生に関するプレゼンテーションが行われた。JWFからは森喜朗会長が Water Web Project on Google Map/Earthとそのプログラムのひとつである世界衛生プロジェクトマップ(World Sanitation Project Map)の開始を宣言した。

続いて、政府及び公共部門から得た教訓について、各国・地域代表による発表が行われ、休憩を挟んだ後半には、パネルディスカッション形式で民間部門の役割、市民社会の役割

についての議論が行われた。

セッションを通じて、「衛生」はミレニアム開発目標達成に向けた基礎であることが認識され、各国政府に対しは、地域の衛生に関する課題解決に向けた各種枠組みと協調しながら、橋本行動計画のよりの確な実施に向けた取り組みの強化に関して呼びかけがなされた。また、洞爺湖サミットの議題に衛生を取り上げるよう日本政府へ要望がなされた。

(5) 水と気候に関する島嶼国対話

主催：太平洋諸国応用地球科学委員会(SOPAC)、ICHARM

本セッションでは、始めに島嶼国と気候変動に関するビデオ上映が行われた。引き続いて行われたパネルディスカッションは、SOPAC 理事長が議長を務め、キリバス大統領、サモアのアヴェアウ公共事業・インフラ・交通大臣、国連国際防災戦略(UN/ISDR)のブリセーニョ事務局長による議論が行われた。セッションでは、島嶼国における気候変動の影響に対する脆弱性、効果的な水資源管理の必要性に対する注意喚起がなされるとともに、「災害対応」から「災害リスク低減・災害管理」へのパラダイムシフトの必要性が議論された。

(6) アラル海流域における水の安全保障確保のための約束：協力と競合

主催者：アラル海救済国際基金(IFAS)

本セッションでは、世界水会議(WWC)のフォーション会長による挨拶の後、IFAS 総裁であるタジキスタン大統領の基調講演が行われた。続いて中央アジアから参加した各国代表からのスピーチ、質疑応答での議論が行われた。議論の結果、各セクター(灌漑、水力発電、環境等)間の水需要の調整、特に国境をまたぐ河川を有する場合、の難しさが認識され、そのような課題に対応する際には、関係セクター・国間の協調が必要であるとされた。

(7) 水関連災害管理

主催：ICHARM

本セッションは、アジア・太平洋水フォーラムの優先テーマ B「水関連災害管理」のリード組織である ICHARM によって開催された。ICHARM センター長によるポリシーブリーフ 2007 にまとめられたメッセージと提言、課題の紹介が行われた後、山本国土交通大臣政務官、インド水資源大臣、中国水利部副部長の 3 名が講演を行った。

その後、UNESCO、WMO、ISDR、ADB の代表、虫明福島大学教授による発表、全体討論が行われたが、特に水関連災害リスク低減の国家開発計画への統合の必要性について集中的な議論がなされた。また、増大しつつある気候変動に伴うリスクへの適応を最優先事項として認識すべきであることが呼びかけられた。災害の女性への影響及び男女平等の視点からの適応策の必要性は緊急に対応すべき分野であるという意見も出された。

セッションの最後には、メッセージと提言が参加者によって採択された。

(8) 発展と生態系のための水

主催：国際自然保護連合 (IUCN)、国連食糧農業機関 (FAO)

本セッションは、アジア・太平洋水フォーラムの優先テーマ C「発展と生態系のための水」のリード組織である IUCN と FAO によって開催された。ネパールの水資源大臣による基調講演の後、ポリシーブリーフ 2007 にまとめられた提言と課題の紹介が行われた。

続くパネルディスカッションでは、基調講演を行ったネパール水資源大臣やフィジーのチョウドリー財務大臣らが参加し、どのように長期的・他分野のニーズのために水を確保し、発展と環境の両面の便益を生み出していくかについて議論がなされた。議論の結果、地域で Win-Win の状況を生み出すために、地方の実施主体と統治の強化の重要性が認識された。また、発展のための政治的意思決定の重要性が認識され、提言を実現化するための新たな取り組みの開始が報告された。

(9) アジア・太平洋地域における水の安全保障確保のためのリーダーシップ：

知識、資金調達、人材育成

主催：ADB、シンガポール PUB、ユネスコ、JBIC、国際協力機構 (JICA)

本セッションは、アジア・太平洋水フォーラムの優先テーマ A「水インフラと人材育成」のリード組織である ADB とそのパートナー組織である JBIC、JICA、主要な活動の柱 (KRA) 1 のリード組織であるシンガポール PUB、ユネスコによって開催された。

黒田 ADB 総裁、ラオスのポンセナー水資源・環境庁長官、ネパールのマハト財務大臣による基調講演の後、オランダ皇太子オレンジ公、冬柴国土交通大臣、フィジー財務大臣、プノンペン市水道公社のエク・ソン・チャン総裁、GWP 総裁によるパネルディスカッションが行われた。議論の結果、水への投資は貧困削減への投資であることが認識された。また、必要とされる下水、衛生、農業設備形成のため、政府と利用者間での適切なコスト配分や近年の経済成長によりもたらされた追加資源の投入等の様々な金融メカニズムについて議論がなされた。

(10) 地域の行動のための能力向上

主催：国連人間居住計画 (ハビタット：UNHABITAT)、ストリームズ・オブ・ナレッジ (SOK)

本セッションは、アジア・太平洋水フォーラムの主要な活動の柱 (KRA) 2 のリード組織である UNHABITAT、SOK によって開催された。

基調講演と 3 つの発表の後、マリ・クリスティーヌ UNHABITAT 親善大使がモデレーターとなり、インド水資源大臣、小嶋静岡市長、水とジェンダー連合のアーメド議長などによるパネルディスカッションが行われた。

本セッションでは、地域の能力向上に資する「能力開発ハブ」形成のための一連の具体的な取り組みが発表された。これらの取り組みは、様々な NGO、市民社会、地方自治体と連携しながら機能していく必要があり、APWF の 3 つの優先テーマ推進を支持するものである。

V 閉会式

会議 2 日目、12 月 4 日(火)の 16 時から閉会式が開催された。閉会式ではまず、各セッションの代表による報告が行われ、その後、水サミット以降の取り組みについて、WWC 会長、第 5 回世界水フォーラムのホスト国であるトルコ政府のアッカ氏によるスピーチが行われた。

続いて、今後の APWF、アジア・太平洋水サミットの他地域との連携可能性について、アメリカ地域を代表して、ブラジル水資源庁のブラガ長官、ヨーロッパ地域を代表して、ヨーロッパ水パートナーズのヨンクラウゼン理事がスピーチを行った。

次に、シンガポール PUB のチャイ長官より、2009 年 6 月のシンガポール国際水週間の開催にあわせて、第 2 回アジア・太平洋水サミットをホストすることを検討している旨の発表があった。

閉会式の最後には、書記のナラヤナン氏が議長総括の発表、同じく書記のウィットラー氏が『別府からのメッセージ』を発表した後、日本政府代表として冬柴国土交通大臣が挨拶を行った。

閉会式は、関係者への謝辞や水問題の解決に向けた参加者による今後の活動に対する期待を述べた森議長による閉会の辞で幕を閉じた。



閉会式の様子

別府からのメッセージ(仮訳暫定版)

我々アジア・太平洋地域のリーダーは、各国のあらゆる分野を代表し、温かいもてなしのもと、日本国大分県の美しい都市、別府において開催された記念すべき第1回アジア・太平洋水サミットに結集し、次のような合意に達した。

- 人々が安全な飲料水と基本的衛生設備を入手することは、基本的人権であり、人間の安全保障の基本であることを確認する。
- この地域において安全な飲料水を利用できない人々の数を、2015年までに半減し、2025年までにゼロを目指す。
- 現在ほど水を必要としない新しい、革新的な衛生システムを採用し、基本的衛生設備の利用できない人々の数を、2015年までに半減し、2025年までにゼロを目指す。
- 水と衛生を各国の経済・開発計画や政治課題における最優先課題とし、水と衛生分野への資金配分を大幅に拡充する。
- 特に貧困層に大きな影響を及ぼすゆえに、水管理に関するすべての面で、ガバナンス、効率性、透明性、公平性を向上させる。女性は社会的弱者である一方、粘り強い活力を有し、進取的である。従って、すべての水関連活動において、女性の能力を向上させなければならない。
- 洪水、干ばつ、その他水関連災害の発生を防止、削減し、犠牲者を適時に救援、支援できるように、早急に効果的な行動をとる。
- 気候変動の影響を受けやすい島嶼国における、生命・財産を守る取り組みを早急に支援する。
- ヒマラヤ山脈地域における冠雪・氷河の融解や、海面上昇等、地域の一部の国ではすでに気候変動の影響が現れている。水と気候変動の関係を議題に組み入れるよう、バリ会議に提言する。
- 2008年に開催されるG8北海道洞爺湖サミットに向けて、具体的な目標を設定する。
発展途上国がMDGsの水と衛生に関する目標を達成できるよう、支援を行う。
発展途上国による、気候変動への適応を支援するために、直ちに行動を起こす。
- 各国は、閣内にあるハイレベルの調整システムの権限を拡大する。可能な国では水担当大臣を任命し、水と衛生に関するすべての問題を統合的に扱う。
- 都市の水路網を修復し、及び農村地域の環境の健全性を保全するなど、この地域の水に育まれた社会の豊かな歴史を尊重する。
- 水の安全が保障されたアジア・太平洋地域という地域全体のビジョンを達成するために、志を一つにするすべての団体、個人が力を合わせて取り組む。

我々は、アジア・太平洋水フォーラムの仲間が作成したポリシーブリーフを支持する。

我々は、この提言の実施に向け、各国政府の努力を促す。

我々には、このビジョンを実現する意志と勇気がある。

VI オープンイベント

12月1日(土)～5日(水)の日程で、別府市他大分県内各地、全国各地で第1回アジア・太平洋水サミットのオープンイベントとしてシンポジウム、セミナー、ワークショップ等の会議や、展示、エクスカージョンなどがさまざまな水関係者によって開催された。

開催されたオープンイベントは、会議形式のものが36、会議と展示を行ったものが3、展示のみが21、その他が7の計67件開催された。うち、大分県委員会は、ビーコンプラザ内のコンベンションホールに大規模な大分県内の水に関する取り組みの展示をした。

オープンイベントの主催者は、水サミット参加者に対してA4 1枚の「オープンイベントからのメッセージ」を提出することができ、提出されたものは、事務局によってまとめられ、水サミット参加者に配布された。



オープンイベントの様子

VII その他

(1) NGOとの交流

12月2日(日)に、第1回アジア・太平洋水サミット事務局は、アジア・太平洋水サミット市民会議との共催で、NGOとリード組織、各分野の有識者が優先テーマごとに意見交換を実施した。意見交換会で得られた結果はアジア・太平洋水サミット市民会議実行委員会からのメッセージとしてまとめられ、サミット参加者に配布された。

また、12月4日(火)の午前には、NGOブリーフィングを開催し、第1回アジア・太平洋水サミット事務局よりサミット1日目の議論の内容を報告するとともに、今後の連携のあり方について議論した。

(2) バイオトイレ体験

12月1日(土)から12月4日(火)の4日間、サミット会場であるビーコンプラザ内のトイレの空きスペースを利用して、実際に使用できるバイオトイレを設置するとともに、エントランスロビーにエコサニテーションの展示を行った。来年の国際衛生年に向けて、国際社会における水・衛生問題に関する意識啓発の一環として、トイレのない26億人に対する解決・改善策の提案につなげる契機としたいという考えのもと、日本トイレ協会と日本水フォーラムが共同で実施したもので、バイオトイレは大分県のバイオトイレメーカー、株式会社ミカサから無償提供され、エコサニテーションの展示のパネル、パンフレット制作等については、JBICにご協力いただいた。



バイオトイレ

(3) ソーシャルイベント

期間中は、大分県委員会主催による同伴者プログラム、エクスカージョン、首脳級参加者の別府市内学校訪問などが開催された。また、会場に設けられた呈茶スペースでは、裏千家、表千家による大分の名水で入れたお茶とお菓子が参加者に振舞われた。

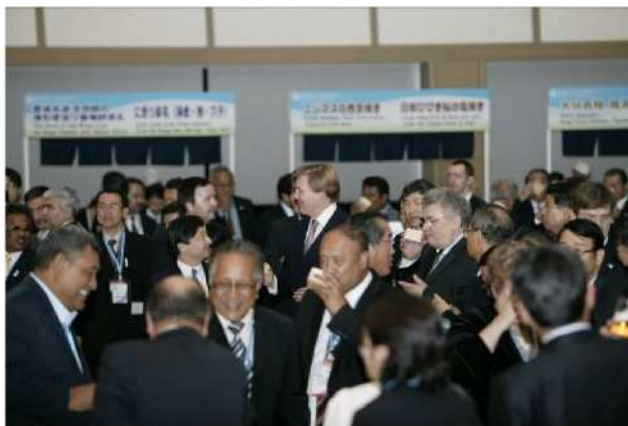


ミクロネシア大統領と亀川小学校の子どもたち



呈茶スペース

初日である12月3日の夜には、同委員会主催の歓迎レセプションが開催され、皇太子殿下もご臨席され、各国首脳などとお言葉を交わされた。4日夜には森運営委員長主催のフェアウェルカクテルパーティーと夕食会を開催し、能の「千秋楽」で水サミットの全公式プログラムの幕が下りた。



大分県委員会主催歓迎レセプション



フェアウェルカクテルパーティーと夕食会

VIII 今後の展望

先に述べたとおり、第 2 回アジア・太平洋水サミットは、シンガポール政府が今年 6 月より毎年開催を予定しているシンガポール国際水週間に併せて開催することを検討している。サミットの主催者であるアジア・太平洋水フォーラムとしては、第 2 回水サミットに向けて、今回の水サミットに提出された『ポリシーブリーフ 2007』や『別府からのメッセージ』、新たに開始・宣言された具体的な取り組みのフォローアップを行っていく予定である。

また、水サミットの成果については、今年 5 月に横浜で開催される第 4 回アフリカ開発会議 (TICAD IV)、7 月の G8 北海道洞爺湖サミットの議論に反映されるよう政府に働きかけていきたいと考えている。

繰り返しになるが、第 1 回アジア・太平洋水サミットの開会式において、福田総理は、「『アジア・太平洋水サミット』での活発なご議論は、この G8 サミットにきわめて大きな力と知恵を与えてくださるものと期待しております。」と述べられた。さらに、今年 1 月のダボス会議での特別講演においては、G8 サミットで取り上げる重要議題のひとつとして、「開発・アフリカ」を挙げ、「人間の安全保障」の観点から、特に「保健・水・教育」に焦点を当てたいと考えていることを明らかにされた。

今回の水サミットでは、『別府からのメッセージ』の中で、「人々が安全な飲料水と基本的衛生設備を入手することは、基本的人権であり、人間の安全保障の基本であることを確認する」、「この(アジア・太平洋)地域において安全な飲料水を利用できない人々の数を、2015 年までに半減し、2025 年までにゼロを目指す」、「現在ほど水を必要としない新しい、革新的な衛生システムを採用し、基本的衛生設備の利用できない人々の数を、2015 年までに半減し、2025 年までにゼロを目指す」ことに合意した。水サミットは、アジア・太平洋地域を対象として行われたが、水供給と衛生問題への取り組みは、政治的意思を必要とし、開発、人間の安全保障という観点からも重要であることは、世界共通である。また、今回の水サミットでも確認されたとおり、アフリカなど他地域との地域間協力のあり方を探っていくことは重要であり、TICAD IV、G8 サミットを通じて、水供給と衛生の問題が政治的に重要な課題として認識され、アジア・太平洋地域以外でも具体的な行動に結びつくよう努めることは、持続可能な開発に資する動きとなるであろう。

また、福田総理は、気候変動を G8 サミットでの最も重要な議題としている。これまで、気候変動に関する議論の主流は、温室効果ガスの削減とそれに向けた国際枠組みに関するものであった。一方で、水サミットでは、ヒマラヤの氷河や水関連災害など、現実には起きている気候変動の影響による水問題に対する取り組みについて、積極的な議論が展開された。水サミ

ットの成果を受けて、G8 サミット、そしてそれ以降の気候変動に関する取り組みの中で、これまで気候変動の政治的な議論の中心を占めていた大気の問題に対する「ミティゲーション(温室効果ガス削減)」だけでなく、水問題解決のための「アダプテーション(適応)」について、日本がこれまでの経験に基づく強いリーダーシップを発揮していくことが期待されている。

IPCC でも水と気候変動に関するレポートの準備が進められている。気候変動は、将来起こりうることとしてではなく、今まさに起こっていることだという認識のもとに、気候変動、そして、その最たる現象である水問題に取り組むことが喫緊の課題となっている。

このように、第1回アジア・太平洋水サミット開催を契機に、水問題を単独の問題として捉えるのではなく、気候変動に対する適応策や貧困・開発問題と水と衛生(トイレ)、水関連災害といったさまざまな分野の多岐に渡る問題に関係し、またその解決がそれらの問題に対して与えるポジティブな影響から、その重要性が再認識されるようになった。水サミットのテーマは、「水の安全保障:リーダーシップと責任」であった。人間の安全保障を実現し、国家の社会・経済発展に貢献するために不可欠である水の安全保障には、国家のトップレベルのリーダーシップが求められている。

2. 平成 20 年度の活動

2.1 シンガポール国際水週間(2008 年 6 月 23 日～27 日)に向けて

近年、世界の水関連イベントでも存在感を増してきているシンガポールが、2008 年より毎年シンガポール国際水週間を開催することを発表した。主催団体のひとつであるシンガポール水事業庁(Singapore PUB)は、アジア・太平洋水フォーラムのリード組織として積極的に活動していることから、日本水フォーラムとしても日本の参加をコーディネートする形で、本水週間に支援していきたいと考えている。

本水週間は、「都市における持続可能な水問題の解決の方策」というテーマのもとで開催される。同様にスウェーデン・ストックホルムで毎年 8 月に開催されるストックホルム世界水週間との差別化を図るべく、ストックホルム世界水週間が研究による水問題の解決を謳っているのに対し、シンガポール国際水週間では、水問題解決のための「技術」と焦点を当てるとともに、それによって、主な対象が都市となっているところが特徴的である。

日本水フォーラムは、メキシコでの第 4 回世界水フォーラム、北京での IWA 世界水会議に続き、日本パビリオンの出展を予定している。

シンガポール国際水週間の概要を以下に示す。(詳細は www.siww.com.sg を参照)

- テーマ:「都市における持続可能な水問題の解決の方策」
全世界の都市における、海水淡水化、水の再利用などの技術による水問題の解決
- 主催者:シンガポール国際水週間会社(シンガポール水事業庁:Singapore PUB、シンガポール環境水資源省、シンガポールエアショー&イベント社の三者によって設立)
- 参加者:世界各国の政府高官、企業のリーダー、水専門家、水事業者
- 目的:水問題解決のためのグローバルなプラットフォームを提供し、課題に取り組み、技術を紹介し、機会を発掘し、功績をたたえる
- 5つの主要行事:
 - a) 水リーダー・サミット(各界のリーダーが一堂に会し、効果的なガバナンスと実行を通じて水問題の解決法を実際に提供すべく、意見交換を行う場)
 - b) 水会議
 - c) 水展覧会
 - d) 水フェスティバル
 - e) 「第 1 回リー・クワンユー水大賞」の授与
- 日本水フォーラムの参加:
 - a) 水リーダー・サミットへの参加(森喜朗アジア・太平洋水フォーラム会長)
 - b) 水展覧会への「日本パビリオン」出展
 - c) 「第 1 回アジア・太平洋水サミット」最終報告書の発表

2.2 第5回世界水フォーラムに向けて

2009年3月15～22日に、トルコ共和国・イスタンブールにて、トルコ政府と世界水会議の共催で、第5回世界水フォーラムが開催される。

全体テーマ「水問題解決のための橋渡し」のもと、2つの主要課題、6のテーマ、22のトピックに関連して、約100分科会が会期中に開催される予定である。分科会に加えて、主要行事として、閣僚級会合、水のEXPO、水フェア、水大賞授与式、社会・文化イベント等が開催される。

日本水フォーラムは、地域コーディネーター(アジア・太平洋地域)及びテーマ・コーディネーター(テーマ1:地球規模の変化と危機管理)を努めている。また、第3回世界水フォーラムを主催したことから、国際運営委員会のオブザーバー(尾田相談役)を務める等、各種準備活動に貢献している。

各種案内、準備状況等については、第5回世界水フォーラム公式ホームページより入手可能である。また、日本をはじめとしたアジア・太平洋地域の関係者の積極的な参加を促進・支援するために連絡会の開催、メーリングリストの開設等を通じ、随時情報提供等を行っている。

第5回世界水フォーラム公式ホームページ

<http://www.worldwaterforum5.org/>



第5回世界水フォーラムロゴ



第1回地域・テーマのコーディネーター会議

第169回国会における福田内閣総理大臣
施政方針演説〈抜粋〉

〈はじめに〉

第169回国会の開会に当たり、国政に臨む所信の一端を申し述べます。

先の国会において、各党各会派による真摯なご議論の積み重ねにより、改正被災者生活再建支援法や改正政治資金規正法などが成立しました。政治資金の問題については、政治に対する信頼を取り戻すため、一層の透明化に向けて更に努めてまいります。補給支援特措法については、国際社会の一員としての責任を果たすとともに国益にもかなう給油活動の再開が必要との考えの下、国会で十分にご審議を頂き、残念ながら野党の皆様にはご賛同を得られませんでした。成立させていただきました。

今国会においても、国民生活に直結する予算や重要法案など政策課題が山積しています。与野党が信頼関係の上に立ってよく話し合い、結論を出し、国政を動かしていくことこそ、国民に対する政治の責任であると私は信じます。自由民主党と公明党の連立政権の基盤の上に立って、政策を分かりやすく、丁寧に説明し、野党のご意見も積極的に取り入れながら、責任ある政治を遂行することに、引き続き全力を尽くしてまいります。国民の皆様並びに議員各位のご理解とご協力を改めてお願いいたします。

〈中略〉

〈むすび〉

昨年12月、私は、大分で開催された「水サミット」に出席しました。そこでツバルのイエレミア首相は、「地球温暖化によって島国であるツバルが、海に沈む」と衝撃的な危機を訴えられました。

こうした事態は以前から危惧されていたことですが、本年の元日に、環境大臣にツバルまで行ってもらい、最新の報告を受けました。

私は、直ちにツバルの支援を検討し、同時に地球温暖化に立ち向かう決意を新たにいたしました。

人類はこれまで、幾多の困難を乗り越え、21世紀を迎えました。今我々が直面しているのは、20世紀に経験した戦争や核兵器開発などといった、各国の利害が絡み合う問題ではなく、放っておけば地球全体が滅びるといふ危機なのです。

この地球の危機に際して、日本が果たすべき役割は極めて大きいと言えます。

日本は、地球環境の危機と闘う最も強力な武器を持っています。省エネルギーや環境保全に役立つ技術力です。日本はこうした技術力を活用して、世界でも有数の、エネルギー効率の高い社会を築いたのです。

なぜ、そのようなことが可能であったのか。

日本には、優れた技術を開発する力、すなわち、人材という得難い資源の宝庫があったからです。数回にわたるエネルギー危機を経験した日本は、人の力、人の能力によってその危機を回避し、ついには、地球の危機をも救えるかもしれない、高い技術力を保有するに至りました。

無駄な排出を極力減らす、低炭素社会を実現するために、日本の力、日本人の力を今、世界が必要としているのです。また地球環境を守ることは、私たちの大切な家族、子や孫の生命を守ることでもあるのです。

私は日本人の力を信じています。日本人は、目前に困難があろうとも、必ずや未来を切り拓く、その力があると確信しています。

「井戸を掘るなら、水が湧くまで掘れ」

明治時代の農村指導者である、石川理紀之助の言葉です。疲弊にあえぐ東北の農村復興にその生涯を捧げた人物です。彼はどんな時も決して諦めることなく、結果を出すまで努力することの大切さを教えました。

そして彼は、様々な事業において、「何よりも得難いのは信頼である。進歩とは、厚い信頼でできた巣の中ですくすく育つのだ」とも述べています。

私は、本日申し上げました政策を推進するに当たり、どんな困難があろうとも、諦めずに全力で結果を出す努力をしまいにします。そして、活力ある日本、世界に貢献する日本へと進歩するためにも、進歩を育む信頼という巣を、国民と行政、国民と政治の間につくってまいりたいと思います。

国民の皆様のご理解とご協力を、切に望むものであります。

首相官邸ホームページより抜粋

<http://www.kantei.go.jp/jp/hukudaspeech/2008/01/18housin.html>